



TITLE:

<批評・紹介> バイレイ氏の近業

AUTHOR(S):

石濱, 純太郎

---

CITATION:

石濱, 純太郎. <批評・紹介> バイレイ氏の近業. 東洋史研究 1937, 2(5): 486-488

ISSUE DATE:

1937-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138756>

RIGHT:

## 批評・紹介

### ペイレイ氏の近業

H. W. Bailey;

1. The word "Bač" in Iranian. Bulletin of the School of Oriental Studies (University of London). Vol. VI, Part 2. page 279—283. 1931.
2. To the Zamašp Namak. I. Ibidem. Vol. VI, Pt 1, p. 55—86. 1931.
3. To the Zamašp Namak. II. Ibidem Vol. VI, Pt 3, p. 581—600. 1931.
4. Bām-Čandak. Ibidem. Vol. VI, Pt 3, p. 822—824.
5. Iranian Studies. Ibidem, Vol. VI, Pt 4, p. 945—955. 1932.
6. " " —I. Ibid., Vol. VII, Pt 1, p. 69—86. 1933.
7. " " —II. Ibid., Vol. VII, Pt 2, p. 275—298. 1934.
8. " " —III. Ibid., Vol. VII, Pt 4, p. 755—778. 1935.
9. " " —V. Ibid., Vol. VIII, Pt 1, p. 117—142. 1935.
10. Yazdi. Iqid., Vol. VIII, Pt 243, p. 335—361. 1936.
11. Taugara. Ibid., Vol. VIII, Pt 4, p. 883—921. 1937.
12. Hvatanica. Ibid., Vol. VIII, Pt 4, p. 923—936. 1937. Bailey and E. H. Johnston;
13. A fragment of the Uttaratantra in Sanskrit. Ibid., Vol. VIII, Pt 1, p. 77—89. 1935.

ペイレイ氏に就いては僕は何も知らない。只新進のイラン學者であつて、スタイン蒐集中の于闐語文書の編纂者であるを知るのみである。氏の近業と云つても右列の論文を偶々一閱するの機會を得たに過ぎないが氏の研究は中亞新發見の資料を自由に驅使してゐるので、中亞研究の到達點を窺ひ得るに極めて便利である。

博覽多識の語學力と明敏果斷の獨創の才とは氏の論文をして廣い學界に於ても異彩たらしめてゐる。

一はパーラヴィ文ブンダヒシュン中の一節を考釋し、

bvč(But)の佛陀なる事、vxs(vaxš)の靈を意味する事、but'sp(bodisag)の菩薩なる事をソグド文を通じて證定したるもの。二三はパーラヴィ文 Namasp Namak を研究したもので、四はその補註。五六七八九はイラン語の言語學的研究の札記だが、五の中ではパーラヴィ文バフマン・ヤシュトに見ゆる種族名地名の研究を試み、ソグドの異名、ソグド王アグラエラタが Gapat 王と呼ばれたる事、それ等の語の轉移を詳かにし、其住地に迄論を進めてゐる。ゴーパートに就ては八でも再び詳論してゐる。七の中ではゾロアスター教義に重要な spenta を詳論してゐる。八では Ardisian 語を、十では Yazd 語を、氏がペルシアで蒐集したる材料と共に研究を發表してゐる。九は于闐語彙で梵藏漢に對照してあり斯學への寄與は大である。十三はスタイン蒐集中の一片三十八行のもので、于闐文式の梵文に出典を一々于闐語で註してある珍本である。十二は于闐語研究三篇であるが、一では中亞諸語の十二支名を證

定し、二では于闐語の十二箇月の名を集證し、三では于闐紀年研究への寄與である。皆中亞出土資料に據る新研究の業績である。

十一は都貨邏問題に對する新研究である。都貨邏大月氏説より Tokharistan がそれなる事、然し玄奘三藏の述べたる同地の文字はバクトリアの希臘文字の事で恐らく Junker が研究中なる伯林蒐集中の推定嘸曉文字に類せるもので、言語はイラン系なる事を斷じ、次いで所謂都貨邏方言 A を論じて當時の living char-ving Language にして阿耆尼語なる事を證し、阿耆尼は Okri や Ok は龍の意なる事、龜茲は Kuci や白を意味し、Kuci √ Kusi √ Kusai でクセンは貴霜に非ず、又阿耆尼の外來語を考へて死語に非ずして轉化しつゝありし生語なるを論じ、中にも arāi は梵語の arya にして地名種族名の如き固有名詞に非ざるを論定した。即ち大月氏がトガラであるが、從來トガラ語と名付くべしとせられた Dialect A は實は阿耆尼語とすべきであり、バクトリアのトガラは阿耆尼・龜茲・跋祿迦とは言語風俗上關係は無く、これ等三語は一語の三方言に外ならず、それ等の間の關係は後出すべき

烏孫考で開明しようと云ふ。本論文は從來提示せられてゐた中亞發見文書の再檢討に根據して論證せられたるものであつて、紛糾せるトガラ問題も種々な點に於て一大躍進を見せたのである。近來快心の作と云つていい。中亞文書の解讀が東洋史の諸問題解決の秘鍵たる事は豫想されてゐたが、かくも見事なる成績を擧げ得たるベイレイ氏の學と識とには敬意を致さざるを得ない。中亞文書に關心少き我が東洋史界も再びこれによつて賑々敷く之を問題化するであらうか。

(石濱純太郎)